

西の湖に設置した張網によるホンモロコ親魚採捕調査

岡本 晴夫・氏家 宗二

1. 目的

内湖が持つ在来魚類の育成機能を把握するため、県内最大の内湖である西の湖に隣接する水田にALC耳石標識を付けたホンモロコのふ化仔魚放流を行い、内湖に流下した稚魚の移動について調査を実施したところ、一定期間を内湖で過ごし、その後ほとんどの個体が琵琶湖へ移動し、冬季には琵琶湖北湖に広く分布していることが確認されたことから、翌春に親魚となって来遊し再生産に寄与するかどうかを把握するため、水田から西の湖への流下場所付近に張網を設置し、親魚の採捕調査を行った。

2. 方法

西の湖に隣接する水田（常楽寺地先）に、平成24年および平成25年の5月中下旬にALC耳石標識（全数標識）を付けた2日齢のホンモロコの仔魚を収容し約1ヶ月間育成後、水田の中干し時に稚魚を流下させた。また、平成25年および平成26年の3月から6月にかけて西の湖への流下場所付近の常楽寺地先に張網を設置し、月1回中旬（6月のみ月上旬・下旬に各1回）に親魚の採捕調査を行った（図1）。採捕したサンプルについて、標識の確認を行った。

3. 結果

西の湖水田由来のホンモロコ親魚(1+魚)は、平成25年では、3月から6月にかけて0~7尾(合計13尾)採捕され、3月に最も多かった(図2)。平成26年では、1~16尾(合計38尾)で4月が最も多かった(図3)。水田から西の湖へ流下したホンモロコ稚魚は琵琶湖へ出た後、産卵のため流下場所付近の水域へ産卵のため来遊している可能性が示唆され、再生産に寄与しているものと考えられる。

これまでの調査結果から、歩留りの高い水田育成稚魚が外来魚を集中駆除した西の湖で一定期間を過ごし、琵琶湖へ出て成長し、翌年には産卵のため流下場所付近に来遊していると考えられることから、今後は、これら親魚に効率的に産卵させるなど、資源造成型栽培漁業の推進が重要である。



平成24年	ふ化仔魚収容(2,200千尾)・中干し流下(695千尾)
平成25年	ふ化仔魚収容(2,320千尾)・中干し流下(774千尾)

図1 ホンモロコふ化仔魚収容・流下状況および張網設置場所

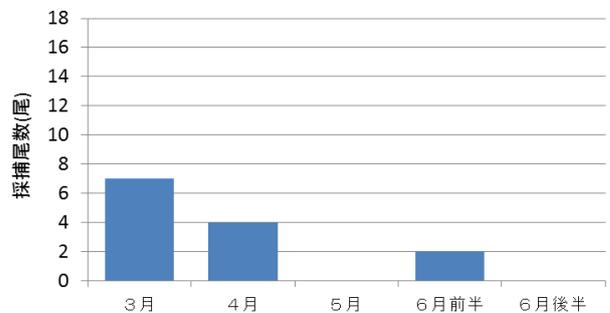


図2 張網によるホンモロコ親魚(1+)採捕尾数(平成25年)

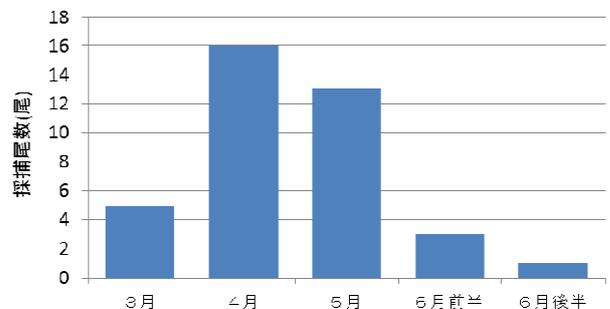


図3 張網によるホンモロコ親魚(1+)採捕尾数(平成26年)